

阪神淡路大震災から26年②

「神戸が生んだ奇跡の歌 幸せ運べるように」

先日、阪神・淡路大震災の事を「校長室から」で話題とさせていただきましたが、先日、保護者の方に偶然お会いし、「校長先生、早いですね。もう26年ですね。あの時は、日本じゅうで募金活動がすごかったですよね。」とお話をいただきました。やはり、あの時の記憶は、日本中の人々が様々な思いで共有しているのだなあと感じます。

過日の3連休中にテレビ放送で「阪神・淡路大震災から25年 幸せ運べるように 神戸が生んだ奇跡の歌」という番組が再放送されました。先日ご紹介した神戸の復興ソング「幸せ運べるように」という歌がどのように生まれ、どのように歌い継がれてきたかのドキュメンタリー番組でした。日常の生活の大切さを深く考えさせられました。

その中のエピソードとして、福島県南相馬の女子中学生の事が取り上げられていました。この女子生徒は、東日本大震災後、津波や原発事故で故郷を失い、地元から離れて暮らしていましたが、ある時、勇気を持って、何もかも失った故郷に足を踏み入れ、無人になった学校、そして流された自宅跡を眼にします。その時までは、恐ろしくてなかなか故郷の事を考えられなかった女子生徒は、実際の風景に接し、自分が思っていた感情以外のものが溢れ出すのに気付きます。「津波はたった一日の出来事だった。でもこの場所は、それより前にずっと自分が長い間、暮らしていた場所で、友達と遊び、家族で暮らしたくさんの楽しい思い出があった場所だった。」と感じたそうです。そして今まで歌う事ができなかった「幸せ運べるように」を歌えるようになったとの事です。この女子生徒は「地震にも負けない強い心を持って・・・。」と始まるこの歌に強い違和感や拒否感を持っていたそうです。「地震ですべてをなくしたのに、地震にも負けない強い気持ちなんて持てるわけがない。強い心なんて持てない・・・。」と、この曲に向き合えなかったそうです。彼女だけではなく、そのように話す方々も実際多くいます。一昨年、生徒を引率して訪問した神戸で出会った方々からも「こんなに有名になった曲だけど、この曲だけはまだ聞けないし、意識的に聞かない。」という声を、私自身も聞きました。26年後の今も、そしてこれからも震災の傷は癒える事はないのだと思います。

この番組の中で、「幸せ運べるように」を歌い継いでいた神戸の小学生たちが福島の南相馬市を訪れ、震災について学ぶシーンがありました。訪問したのは、まだ震災の傷跡が残り、住民の帰還もままならない状態の時でした。児童たちは一軒の美容室を訪問し、経営しているご夫婦に「今、幸せですか？」と尋ねます。すると「幸せだよ。普通が幸せ。そう、普通が幸せなんだよ。だって、みんなと会えるし、お客さんがこんなふうに来てくれているでしょ。」児童の中の一人は少し戸惑ったように「普通が幸せ・・・」とつぶやきます。この児童たちは、今、高校生になっているのでしょうか。もしかしたら今は、「普通が幸せなんだよ。」と教えられた意味をかみしめているかもしれません。

災害の度にこの曲は発信されますが、今の日本にとっても必要な曲なのかもしれません。

幸せ運べるように

地震にも負けない強い心をもって、亡くなった方々の分も 毎日を大切に生きていこう
傷ついた神戸を もとの姿に戻そう 支え合う心と明日への希望を胸に
響き渡れ 僕たちの歌 生まれ変わる神戸の街に 届けたい私達の歌 幸せ運べるように

裏面へ

東日本大震災からまもなく10年

「群青」 離ればなれになった生徒たちの誓い

群青

作詞 南相馬市立小高中学校 平成24年度卒業生

作曲 小田 美樹

ああ あの街で生まれて君と出会い
たくさんの想い 抱いて 一緒に時をすごしたね
今 旅立つ日 見える景色は違っても
遠い場所で 君と同じ空 きっと見上げてるはず
「またね」と手を振るけど 明日も会えるのかな
遠ざかる君の笑顔 今でも忘れない
あの日見た夕日 あの日見た花火
いつでも君がいたね
当たり前が幸せと知った
自転車をこいで 君と行った海
鮮やかな記憶が 目を閉じれば 群青に染まる

あれから二年の日は 僕らの中を過ぎて
3月の風に吹かれ 君を今でも想う
響け この歌声 響け 遠くまでも
あの空の彼方へも
大切なすべてに届け
涙のあとにも 見上げた夜空に
希望が光ってるよ
僕らを待つ 群青の街で
ああ きっとまた会おう あの街で会おう
僕らの約束は 消えはしない 群青の絆
また会おう 群青の街で

私たちの東北地方を襲った大震災から、まもなく10年を迎えます。「くぎりの年」「節目の年」とも呼ばれますが、被災した方々にとって、時の筋目が心のくぎりになるという事はないであろうと感じます。実際に現在も苦しみを抱えて生きている方々が数多くいます。皆さんの中にも本校の教職員の中にも、人知れず苦しんでいる方々がいるかもしれません。私も父方の親戚をすべて失いました。

お隣の福島県では地震、津波、そして原発事故の影響で、今も故郷への帰還を果たせずにいる方々が数多くいらっしゃいます。当時、福島県南相馬市の小高(おだか)中学校で生まれた「群青」という曲がありません。皆さんは知っていますか。

震災後も歌い継がれ、現在は合唱コンクールの自由曲として歌われたり、卒業の歌として歌ったりする学校も少なくありません。

震災当時、この中学校では、友人を津波で亡くしたり、原発事故からの避難でこの土地を離れたりした家族が多くいました。小高中学校は近隣の小学校での仮校舎生活、多くの生徒達は長い間仮校舎で学習したり、この土地を離れていったりした生徒もいました。

残された生徒たちは、深く傷つき、音楽の授業で歌を歌えなくなっていたそうです。希望の曲、未来への曲、前を向いて歩きだそうとする曲、前向きに進んでいこうとするあらゆる曲を歌えなくなっていました。

その苦しみは私たちには推し量ることはできません。その時を、その場を、その心を共有していた当時の音楽科の小田美樹先生は、彼らの辛さ、苦しさ、寂しさ、わずかな希望、言葉に出来ない想いを、彼らの心に寄り添い、創り上げたものが「群青」です。

辛さや苦しみを抱えながら、しかし前を向いてこれからも生きていく糧になる曲を歌わせたいと考え、当時の生徒達の日記、言葉、なにげない会話、日常の言葉をつなぎ合わせ詩が作られました。

一緒に過ごした日々、しかし震災で離ればなれになった友達、当たり前と感じて疑わなかった毎日が失われたことへのやるせなさ、明日になったらもう会えないかもしれないという不安、友達と一緒に思い出を築いた群青の海を想い、今は離れていても、いつかまた会おう、いつの日かまたこの群青の海で、この街で会おう、離れていても見上げている空はつながっている、心の絆が、心の叫びが名曲に変わりました。もし、時間があれば皆さんも聞いてみてください。時は流れ、ハード面が復旧しても、人間の心に筋目はないと思います。